

ニガウリの促成栽培に適する品種および株間

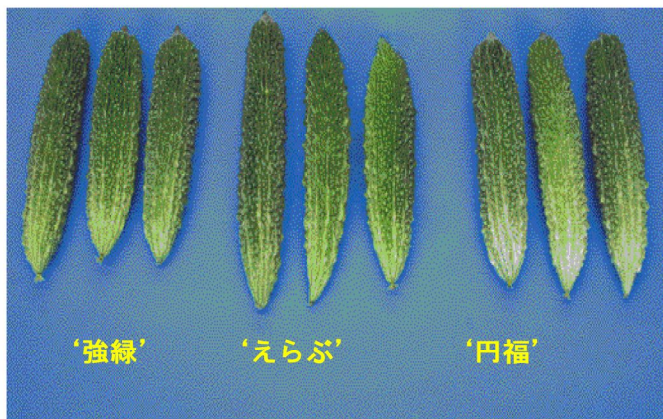


写真 果実の形状

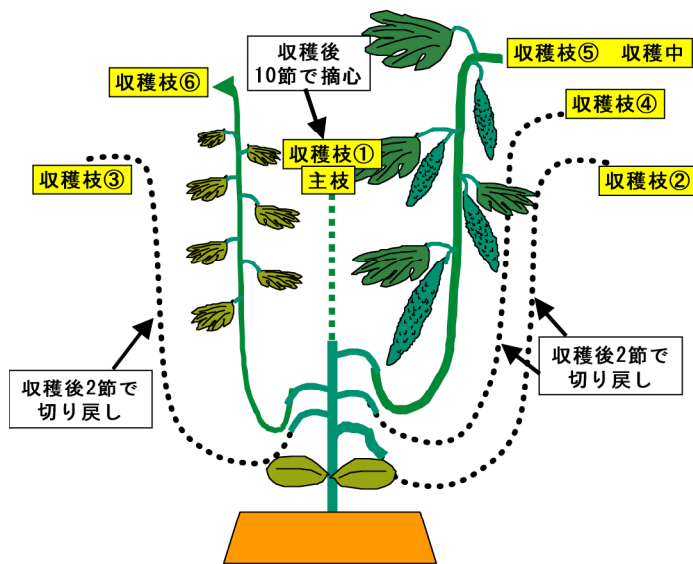


図1 1本仕立て「收穫枝連続更新法」の模式図

注) 主枝の果実4~6果を收穫後に10節残して摘心する。10節までの側枝は1~2節残して摘心し、摘心した側枝から発生する質の良い枝を收穫枝として誘引し、4~6果收穫後に1~2節残して切り戻す。以後この作業を繰り返す。

ニガウリは、消費者の健康志向が高まるなか、機能的な期待される野菜として、消費の周年化が進んでいます。流通量の少ない冬春期には高単価で販売されることから、促成栽培に取り組む事例がみられるようになりました。しかし、促成栽培に適した品種や株間、整枝方法などの栽培技術は確立されていません。そこで、新しい整枝法「收穫枝連続更新法」(図1)により品種と株間について検討しました。

その結果、品種では「えらぶ」の収量は栽培期間を通して安定しており、6月末日ま

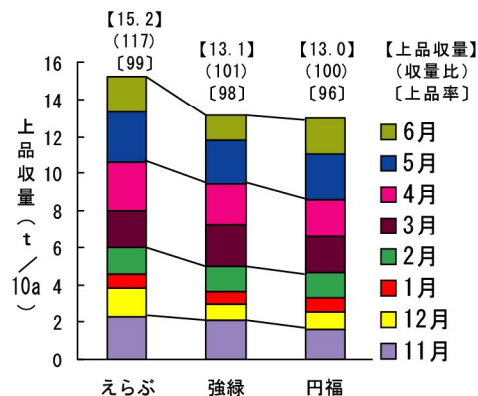


図2 品種の違いと月別上品収量

注) 播種: 2007年8月31日、定植: 9月18日、栽植方法: うね幅135cm、株間67cm (1,105株/10a) 温度管理: 午前28℃、午後25℃、平均夜温18℃ (16~20時は20℃、20~24時は18℃、24時~6時は16℃)。

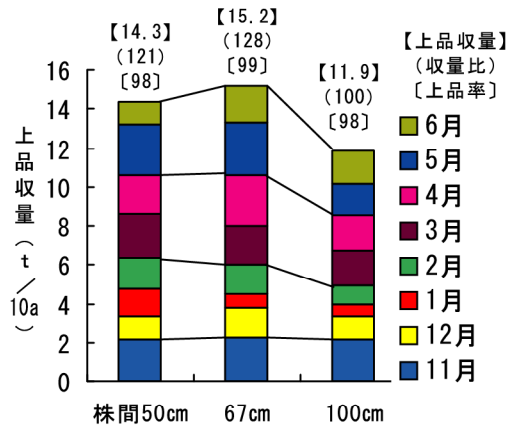


図3 株間の違いと月別上品収量

注) 品種: 「えらぶ」、播種日・定植日・うね幅: 図2と同じ。栽植株数: 株間50cmは1,481株/10a、株間67cmは1,105株/10a、株間100cmは740株/10a。温度管理: 平均夜温は図2と同じ。

でに目標とする10a当たり約15tの高い収量が得られました(図2、写真)。また、株間の試験では、株間67cmが最も多収となりました(図3)。

今後は、省力的な整枝法や栽植株数、夜温管理等について更に検討を進める予定です。

(施設野菜担当 橋田祐二 088-863-4918)